

父・岡道男

岡芳樹

父の仕事は、「ここまでやれば十分」という区切りが明確でなく、また、本人の性格として中途半端なことができない人でした。しかも、週のうち半分以上は家で仕事をしていたので、主に仕事中心の生活を送っていました。

家で仕事をするときは、朝食のあとから夜遅くまで一日中机に向かっていました。このような生活は、身体を動かさないため食欲もわかないし、ストレスもたまります。あまり健康的とは言えません。しかし、父のことを思い出すとき、まず思い浮かぶのが書斎で机に向かって仕事をしている姿なのです。

随分昔になりますが、昭和40年代後半ぐらいまでは、高槻にある私たちの家のまわりには豊かな自然が残っており、夜には美しい星空を眺めることができました。家の庭から天の川がはっきりと見え、よく父と一緒にオペラグラスや星座早見盤を用いて星空を眺めたりしたものです。のちに私が天文の趣味を持つようになったのは、その頃の影響かもしれません。

仕事が忙しかったせいか、家ではどちらかというと無口で、気難しい顔をすることもある父でしたが、実際には細やかな気遣いの持ち主でした。まだ赤ん坊だった私の娘を実家に連れて行ったときには、ときどき書斎から出てきてそっと様子を見てくれるような、優しいところがありました。一方、子どもたちに対しては自主性を重んじ、自らの意思でやりたいと思ったことに対して反対することはありませんでした。進学先や就職先の進路を決めるときにも本人の意思を尊重してくれたと思います。自分の意見を押しつけたり、説教をすることもありませんでした。

特に大きな病気をしたことのなかった父ですが、平成8年の春、大腸癌を患い最初の手術を受けました。この時は順調に回復して、仕事にも復帰することができましたが、2年後の平成10年の夏、右肺に癌が転移していたことが分かり、2度目の手術を行いました。この後も一旦回復し、「キケロー選集」の出版などの仕事に再び精力的に取り組んでいたのですが、翌平成11年春、肺の癌が再発していることが分かりました。3度目の手術はできず、抗癌剤での治療を続けておりましたが、同年11月には腰椎への転移が分かり、12月に入院し

て以後闘病生活を送っておりました。

最後の入院前に私を枕元へ呼び、いろいろと話をしました。今までの仕事の成果が評価され、「キケロー選集」などの大きな仕事を残せたこと、だが欲張って仕事をし過ぎるとこのように身体を壊してしまうから気をつけるように、と達成感とも自戒とも受け取れる話もありました。自分の人生は自分で責任を持て、という父なりのメッセージだったのかもしれませんが。その後入院してからは、腰椎の癌の痛みに耐えながらも、自分のことよりも残される家族のことを最後まで気遣っていました。

父が亡くなった後、あらためて父の言葉と行動を深く受けとめるようになりました。そして、父は言葉ではなくその人生を通じて、「自分の人生は自分で責任を持つ」ことを私たちに示してきたのではないかと考えるようになりました。全力で仕事に取り組んだ父の姿と、病と最後まで闘った父の姿。このように強い精神力で人生に立ち向かってきた父の姿を思い返すたび、父に対する尊敬と感謝の念は強くなっていくのです。